

《聖書》マタイによる福音書 28:16-20

神の働きかけ

私たちが神のことを知っているといっ
ても、ごく限られたことだけです。神か
らの働きかけを受けることによって、神
のある面を知っているにすぎません。同
じ人間でも、その状態によって受けとり
方も変わってきます。まして、違う人間
なら感じ方もそれぞれ違います。

聖書は決して神のことを説明してはい
ません。ある人が、あるいは、ある民族
が、どのように神の働きかけを受けたか
ということ伝えてはいるだけです。神が
どのように歴史の中で働いておられたか
を信仰の目で語っているのです。

私達も、今聖書を書くことができます
。それは、私たちのまわりで起こって
いるできごとの中に、神の働きを見いだ
せば、それを伝えることができます。昔
の人に働きかけた神は、今も私たちに働
きかけているのです。

父と子と聖霊

教会において、父と子と聖霊を、三位
一体の神と呼んできました。この三位一
体の神という表現は、教会の伝承の過程
で使われるようになったのであり、聖書
においてはこの表現は使われていません。

たしかに、マタイによる福音書28:19
に伝えられているように、父と子と聖霊
という表現は、かなり古くからあったよ
うです。また、ヨハネによる福音書14:1
-31では、父と子と聖霊の関係について
説明がなされています。

人が神と結びつけられるために、神か
らの働きはいろいろと示されています。
人はそうした神からの働きかけを受けて、
はじめて、自分にも神の力が働いている
ことに気づくのです。神のことをうまく
説明してもなんにもなりません。むしろ、
どうしたら神の働きかけを感じるものが
できるかを知る必要があります。

父なる神は、万物の創り主として描か
れています。旧約聖書に出てくる父なる
神は、きびしく人をきたえていく姿で描
かれています。しかし、いつでも、どん
な困難にあっても、信頼できることを人
々に教えています。

子としてのイエスは、力のない人や、
病人や、貧しい人に手をさしのべる愛の
姿で描かれています。その反面、律法学
者や、金持ちや、権力を持った人に対し
ては、ののしることもします。イエスは、
大いなる力を出すことなく、あえて十字
架の死をすすんでひき受けていきます。

聖霊は、弟子たちの活動をささえる原
動力です。使徒言行録の主役は聖霊です。
弟子たちは、その道具とさえ見なされて
います。

人は、こうした描写を通して、神の働
きかけを、しっかりとつかむことができ
るのです。ある一面だけでは、神の働き
かけを知ることはできません。いろんな
角度から見ることによって、神を知って
いくことができるのです。三位一体は神
についての説明の言葉にすぎません。人
が生きていく上で力にはなりません。神
の具体的な働きかけを知ってこそ、勇気
が出てくるのです。

三位一体の主日B年（滝野）